日本のオペラ公演2021
──公演データの分析とその考察──

昭和音楽大学オペラ研究所・石 田 麻 子

1. はじめに

世界が苦しんでいるコロナ禍が、2020年以降どのようにオペラの創造環境に影響を与えたのだろうか。2021年版では、2020年版に引き続き、その把握と記録に努めている。多くの困難が立ちはだかって、オペラを上演することの意義すら問いかけたくなるような状況にありながらも、多くの公演がつくられただけではなく、オペラ公演が社会に対して何ができるのか提示しようと活動がおこなわれたと言っても良いのではないだろうか。それら一つひとつの公演に想いを馳せながら、さっそくデータからみた2021年のオペラ公演の状況を見ていこう。

1-1. A表（大規模会場での公演）とB表（中・小規模会場での公演）、C表（セミ・ステージ形式等の公演）の区分、中止公演への言及【表1】

本稿では、基本的に全幕上演されたオペラ公演を取り上げている。さらに、756席以上の大規模会場での公演をA表に、756席未満の中・小規模会場での公演をB表にそれぞれ分けて、さらにその傾向を検証しているのは例年通りである。区分の基準は、大阪音楽大学ザ・カレッジ・オペラハウスの座席数である。また、小学校や中学校など、各学校内の体育館や講堂などでの公演は、一律B表の中・小規模公演に分類している。

また2018年からは、総上演回数に加えて、例年はC表に掲載してきた大規模会場でのセミ・ステージ形式や演奏会形式での全幕上演回数と、上演した団体数を積み上げている。オペラ作品として完全な形態ではないとはいえ、近年は音楽の本質的な力を伝える優れた上演が多数おこなわれるようになったことが理由である。なお、この数にはハイライトや抜粋形式での公演は含んでおらず、全幕上演のみの数字としている。具体的なC表掲載公演への言及は、これまでどおり「6. 演奏会形式など」の項でまとめるにとどめている。

また、2020年版からは、中止・延期公演を把握できる範囲で取り上げて、表3～表6では、実施発表済の公演に関する中止・延期回数についても掲載している。

1-2. 国内団体、教育研究団体、海外団体の分類、中止・延期公演について

（分類について）

「国内団体」公演は、オペラ団体の公演、劇場・音楽堂等による公演、団体や劇場間の共同制作公演、高等教育機関での公演であっても学生などが自主的に行う公演を、この区分に分類している。「教育研究団体」は、高等教育機関が主催する教育研究発表を目的とした公演、オペラ団体や劇場・音楽堂等の研修所による研修成果発表が該当する。「海外団体」は、海外の歌劇場や音楽祭などの来日公演だが、2020年のコロナ禍以降はほとんどおこなわれていない。

（団体数について）

劇場や団体が、他劇場や他団体と共同制作を実施した公演等は、当該組織が単独で実施した公演とは区別したうえで、別団体としてカウントした。さらに同じ団体が組んだ相手を変えて共同制作した場合も別団体として区別しているのも従来どおりである。例えば、新国立劇場の単独の主催公演と、新国立劇場、東京文化会館との共同制作は別団体とし

表1　分析対象と上演団体の区分（○は本稿での分析対象、×は対象とせず、巻末に公演表を掲載）

	1.　国内団体	2.教育研究団体	3.　海外団体	中止公演
A表：大規模会場公演＝756席以上の客席数	○	○	○	表3～表6該当団体のうち発表分のみ
B表：中・小規模会場公演＝756席未満の客席数	○	○	○	
C表：セミ・ステージ形式等	図1のみ○（大規模会場でのセミ・ステージ形式等全幕上演のみ）			

図1　総上演回数と活動団体数の推移

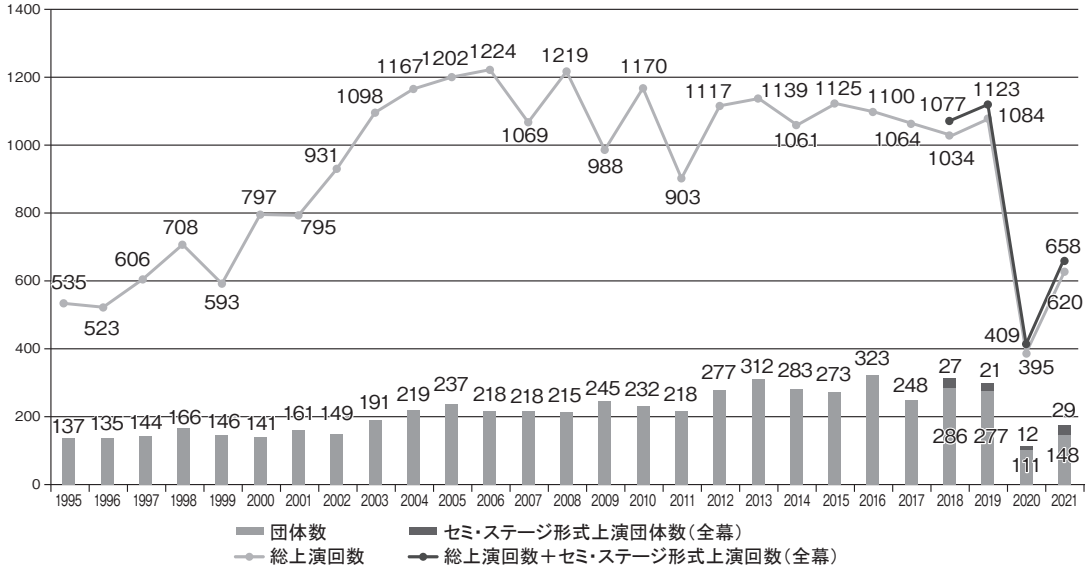

表2　2021年のカテゴリー別オペラ上演団体活動状況一覧

A.　大規模会場（756席以上）		
カテゴリー	団体数	総上演回数
1.国内団体	66	284
2.教育研究団体	7	12
3.海外団体	1	2
合計/総団体数・総上演回数	74	298/620

B.　中・小規模会場（756席未満）		
カテゴリー	団体数	総上演回数
1.国内団体	96	312
2.教育研究団体	6	10
3.海外団体	0	0
合計/総団体数・総上演回数	102	322/620

合計（A＋B）		
カテゴリー	団体数＊	総上演回数
1.国内団体	148	596
2.教育研究団体	10	22
3.海外団体	1	2
合計	159	620

＊団体数の合計は、A表とB表をあわせて再度集計したもの。同一の団体が規模の異なる会場で公演した場合もあるため、A表とB表を合計した数よりも少なくなる。

ている。

2.　日本のオペラ公演2021年

2-1.　総上演回数と活動団体数の推移【図1】

2021年は、A表とB表をあわせた総上演回数が620回と、2020年の395回から大幅に増えた。さらにセミ・ステージ形式等での全幕上演回数が38回を数え、合計658回となった。

上演団体数は、2020年は111団体に減少、さらにセミ・ステージ形式で開催した団体は12だったが、2021年は上演団体数が148団体、セミ・ステージ形式での上演団体は29団体となっている。

2-2.　カテゴリー別オペラ上演団体活動状況【表2】

表2以降は、全幕・全曲の完全な舞台上演を主な分析対象としている。

大規模会場での公演は、2015年の505回以

降は継続的に減少してきていた。さらにコロナ禍により、2020年は133回まで減少していたが、2021年は298回と増加している。2019年が379回だったのでまだ元通りとはいえない。

一方で、中・小規模会場での公演は、2016年は637回、2019年は705回と大きく増加していた。それが2020年は262回となり、2021年には322回と、これも増加している。

各地のオペラ団体や劇場・音楽堂等などによる国内団体の上演は、大規模会場では66団体284回、中・小規模会場で96団体312回、合計148団体596回が記録された。

教育研究団体による公演は、2020年は8団体による12回だったが、2021年は10団体22回と増加している。秋の公演準備にとりかかる夏の時期にコロナ禍が拡大したものの、その合間を縫うように各組織が学生や若手歌手などの発表公演をやり遂げた結果である。

海外団体は、2021年も1団体の2公演のみにとどまっている。

いずれのカテゴリーも2020年に比べれば増加しているものの、2019年までの状況には戻っていないことがわかる。

2-3. 国内団体公演【表3、表4-1、表4-2】

表3では、2021年に大規模会場で10回以上の公演を実施した国内団体の活動についてまとめている。東京二期会と日本オペラ振興会の2団体、日生劇場、びわ湖ホールの2劇場は、引き続き大規模公演を数多く実施した。東京二期会や日本オペラ振興会やオペラシアターこんにゃく座などは、本公演に加えて、コロナ禍における緊急支援を受けて各地域で公演がおこなわれた。

東京二期会は、2月に《タンホイザー》4回を実施、7月に《ファルスタッフ》3回（1回中止）、8月に《ルル》3回を実施した。9月の《魔笛》は、東京文化会館での本公演4回に加えて、文化庁「大規模かつ質の高い文化芸術活動を核としたアートキャラバン事業」を受けて、山形、高崎、札幌で1回ずつ実施、合計7回の上演となった。加えて、11月に《こうもり》4回、1月に《雪の女王》を中・小規模会場で2回、《サムソンとデリラ》をセミ・ステージ形式で2回上演した。

日本オペラ振興会は、藤原歌劇団と日本オペラ協会の2つの事業部による公演をそれぞれ実施した。

藤原歌劇団は1月に《フィガロの結婚》を昭和音楽大学テアトロ・ジーリオ・ショウワで2回、1～2月に《ラ・ボエーム》を東京文化会館で2回、愛知県芸術劇場で1回の合計3回、6月には日生劇場で《蝶々夫人》を3回実施した。《蝶々夫人》は上記アートキャラバン事業により、さらに浜松、高知、下関で各1回の合計3回、地域での公演がおこなわれ、合計6回となった。9月には新国立劇場オペラ劇場（オペラパレス）で《清教徒》を3回、新制作上演した。この他、学校公演で《助けて、助けて、宇宙人がやって来た！》を4回実施（3回中止もしくは延期）、さらに文化庁「ARTS for the future!」の助成を受けて、11月には《ヘンゼルとグレーテル》2回をハイライト上演した。

日本オペラ協会は2月に中村透作曲《キジムナー時を翔ける》を2回上演した。さらに、4月の「川崎・しんゆり芸術祭アルテリッカしんゆり」で、《魅惑の美女はデスゴッデス！》を、藤原歌劇団による《ジャンニ・スキッキ》とのダブルビルとして、2回上演している。

日生劇場は、「ニッセイ名作シリーズ2021」と題して、《ラ・ボエーム》の学校向け公演を自らの劇場で5回、高崎（「NISSAY OPERA 2021」も兼ねた公演）、堺、名古屋で各1回、合計8回実施した（招待校の参加辞退により、1回中止）。同じ演目を一般観客向けの「NISSAY OPERA 2021」として2回上演、

表3　2021年の国内団体公演・中止および延期公演データ*1

団体名	上演作品	A.大規模会場		B.中・小規模会場		合計	中止・延期公演*2	
		上演回数	合計	上演回数	合計		中止・延期	合計
オペラシアター こんにゃく座	アルレッキーノ―二人の主人を一度に持つと―	12	69	1	86	155	1	25
	イヌの仇討あるいは吉良の決断	5		4			0	
	さよなら、ドン・キホーテ！	0		14				
	森は生きている	13		29			9	
	遠野物語	33		6			0	
	タング―まほうをかけられた舌―	2		4			5	
	ネズミの涙	1		3			0	
	ロはロボットのロ	2		23			2	
	銀のロバ	1		2			8	
東京二期会*3	タンホイザー	4	23＋【2】	0	2	25＋【2】	0	1
	セルセ	2						
	ファルスタッフ	3					1	
	ルル	3					0	
	魔笛	7						
	こうもり	4						
	雪の女王	0		2				
	【サムソンとデリラ】（セミ・ステージ形式）	【2】		0				
藤原歌劇団*4	フィガロの結婚	2	16	0	4	24	0	4
	ラ・ボエーム	3					1	
	ジャンニ・スキッキ	2					0	
	蝶々夫人	6						
	清教徒	3						
	助けて、助けて、宇宙人がやって来た！	0		4			3	
日本オペラ協会	キジムナー時を翔ける	2	4	0	0		0	
	魅惑の美女はデスゴッデス！	2						
日生劇場*5	ラ・ボエーム	13	21	0	0	21	1	2
	蝶々夫人	3					0	
	カプレーティとモンテッキ	5					1	
滋賀県立芸術劇場 びわ湖ホール*6	魔笛	4	12＋【2】	0	0	12＋【2】	0	0
	つばめ	4						
	カルメン	2						
	泣いた赤鬼	2						
	【ローエングリン】（セミ・ステージ形式）	【2】						
上位　団体合計上演回数／総上演回数	—	—	145/298【4】	—	92/322	237/620【4】	32	32

＊1　大規模会場で10回以上の上演を実施した団体。大規模会場での総上演回数の合計順。共催公演、共同制作公演を含む。さらに今年は中止・延期となった演奏会形式等の公演もリストにいれている。
＊2　延期された公演数には、年内に実施、あるいは他演目に替えて実施されたケースも含まれている。
＊3　東京二期会はこのほかにも《魔笛》5回と《ばらの騎士》1回を公演しているが、いずれもハイライト公演のため、本表には含めていない。
＊4　藤原歌劇団と日本オペラ協会は、（公財）日本オペラ振興会内のオペラ団体。《ヘンゼルとグレーテル》はハイライト公演のために、この表には含めていない。
＊5　日生劇場が制作、劇場内外で上演した公演。そのうち《蝶々夫人》は藤原歌劇団との共催公演。《こうもり》は東京二期会との提携公演のため、表中には入れていない。
＊6　びわ湖ホール制作オペラでは、この他に《こうもり》《カルメン》が各1回ずつ演奏会形式で実施されたがハイライトだったため表中には含めていない。また、びわ湖ホール声楽アンサンブルの公演、滋賀県主催の《泣いた赤おに》公演もびわ湖ホールが制作したため、ここには含めている。

表4-1　2021年新国立劇場主催のオペラ公演と中止公演（新国立劇場オペラパレスおよび中劇場プレイハウス：大規模会場公演、特記がなければ主催は新国立劇場）

上演月	作品名	作曲家名	上演回数	中止・延期	公演タイトル	特記事項
1～2月	トスカ	G.プッチーニ	5	0	beyond2020プログラム　新国立劇場　2020/2021シーズンオペラ	全３幕／日本語・英語字幕付原語上演
2月	フィガロの結婚	W.A.モーツァルト	4	0	beyond2020プログラム　新国立劇場　2020/2021シーズンオペラ	全４幕／日本語・英語字幕付原語上演
3月	ワルキューレ	R.ワーグナー	5	0	beyond2020プログラム　新国立劇場　2020/2021シーズンオペラ	全３幕／日本語・英語字幕付原語上演
4月	夜鳴きうぐいす	I.ストラヴィンスキー	4	0	beyond2020プログラム　新国立劇場　2020/2021シーズンオペラ	新制作／全３幕／日本語・英語字幕付原語上演
4月	イオランタ	P.I.チャイコフスキー	4	0	beyond2020プログラム　新国立劇場　2020/2021シーズンオペラ	新制作／全１幕／日本語・英語字幕付原語上演
4月	ルチア	G.ドニゼッティ	3	1	令和２年度第３次補正予算文化　庁ARTS for the future! beyond2020プログラム　新国立劇場　2020/2021シーズンオペラ	全２部（３幕）／日本語・英語字幕付原語上演／４月25日公演は中止
5月	ドン・カルロ	G.ヴェルディ	4	0	beyond2020プログラム　新国立劇場　2020/2021シーズンオペラ	全４幕／日本語・英語字幕付原語上演
7月	カルメン	G.ビゼー	6	0	beyond2020プログラム　びわ湖ホールとの提携公演　新国立劇場　2020/2021シーズンオペラ	新制作／全３幕／日本語・英語字幕付原語上演
7月	カルメン	G.ビゼー	4	2	beyond2020プログラム　新国立劇場　高校生のためのオペラ鑑賞教室2021	全３幕／日本語・英語字幕付原語上演 ７月15,16日公演は中止
8月	Super Angels スーパーエンジェル	渋谷 慶一郎	2	0	令和３年度文化庁日本博を契機とする文化資源コンテンツ創成事業　beyond2020プログラム令和３年度日本博主催・共催型プロジェクト　新国立劇場三部門連携企画　子どもたちとアンドロイドが創る新しいオペラ	主催：文化庁／（独）日本芸術文化振興会／（公財）新国立劇場運営財団 初演／新制作／全1幕／日本語・英語字幕付日本語上演
10月	チェネレントラ	G.ロッシーニ	6	0	令和３年度（第76回）文化庁芸術祭オープニング・オペラ公演 国際音楽の日記念　beyond2020プログラム　新国立劇場 2021/2022シーズン開幕公演	主催：文化庁芸術祭執行委員会／新国立劇場 新制作／全２幕／日本語・英語字幕付原語上演
11～12月	ニュルンベルクのマイスタージンガー	R.ワーグナー	5	0	文化庁委託事業「令和３年度戦略的芸術文化創造推進事業」　令和３年度（第76回）文化庁芸術祭協賛公演　beyond2020プログラム　新国立劇場　2021/2022シーズンオペラ　オペラ夏の祭典2019-20 Japan↔Tokyo↔World	主催：文化庁／新国立劇場 新制作／全３幕／日本語・英語字幕付原語上演
12月	蝶々夫人	G.プッチーニ	4	0	beyond2020プログラム　新国立劇場　2021/2022シーズンオペラ	全２幕／日本語・英語字幕付原語上演
—	12作品	10人	56/298	3	—	—

表4-2　2021年新国立劇場主催のオペラ公演(他会場での公演：大規模会場公演)

上演月	作品名	作曲家名	上演回数	中止・延期	会場/公演タイトル	特記事項
7～8月	カルメン	G.ビゼー	2	0	会場：滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール大ホール 公演タイトル:beyond2020プログラム　びわ湖ホールとの提携公演	主催：滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール beyond2020プログラム 関西元気文化圏参加事業 文化で滋賀を元気に！プロジェクト　経済産業省令和２年度補正予算「コンテンツグローバル需要創出促進事業費補助金」 新国立劇場提携オペラ公演 沼尻竜典オペラセレクション
10月	ドン・パスクワーレ	G.ドニゼッティ	2	0	会場：ロームシアター京都メインホール 令和3年度文化庁文化芸術創造拠点形成事業　新国立劇場　高校生のためのオペラ鑑賞教室2021	主催：京都市/ロームシアター京都（(公財）京都市音楽芸術文化振興財団）/新国立劇場 全３幕/字幕付原語上演
—	2作品	2人	4/298	0	—	—

さらに堺、名古屋、盛岡で各1回公演を実施、合計13回となった。さらに、《カプレーティとモンテッキ》を「ニッセイ名作シリーズ2021」として3回（招待校の参加辞退により、1回中止)、「NISSAY OPERA 2021」として2回公演をおこなっている。

オペラシアターこんにゃく座は、2020年の103回から2021年には155回へと公演数を増加させている。しかし、これもコロナ禍前の実績には戻っておらず、中止・延期公演が25回となったことも大きく影響している。同団は創立50周年を迎えており、いくつかの記念公演を開催した。このほか、コロナ禍に対応するための複数の緊急支援事業を受けつつも、毎年数多く実施してきた学校公演は、感染が終息せず中止措置となることも少なくない中での活動となった。

びわ湖ホールは、びわ湖ホール声楽アンサンブルなど若手を中心としたキャスティングにより、次期芸術監督の阪哲朗指揮、中村敬一演出の《魔笛》を4回公演した。さらに、芸術監督の沼尻竜典指揮で《ローエングリン》をセミ・ステージ形式で2回上演している。新国立劇場との提携オペラ公演《カルメン》は沼尻竜典指揮で2回上演された。《つばめ》は4回、《泣いた赤おに》は自らの劇場で1回、東近江で1回上演している。

表4-1と4-2では、**新国立劇場**の公演をまとめた。新国立劇場は、2021年は、新制作が5プロダクション（うち1つはダブルビル）予定された。4月の《夜鳴きうぐいす》《イオランタ》のダブルビル、7月の《カルメン》が2020/2021シーズンの公演だった。2021/2022シーズン開幕公演となった10月の《チェネレントラ》に加えて、「2020東京オリンピック・パラリンピック」の機をとらえて準備されてきたプロダクションが2つある。まず、8月の渋谷慶一郎作曲による新作《Super Angels スーパーエンジェル》、さらに11月の《ニュルンベルクのマイスタージンガー》で、後者は2021/2022シーズンオペラにも位置づけられている。

2021年は2つのプロダクションの劇場外公演がおこなわれたが、7～8月は《カルメン》がびわ湖ホールで2回、10月は「高校生のためのオペラ鑑賞教室」として《ドン・パスクワーレ》がロームシアター京都で2回実施された。

表5　2021年の教育研究団体公演活動データ＊1

団体名	作品名	作曲家名	A.大規模会場		B.中・小規模会場		実施公演	中止・延期
			上演回数	合計	上演回数	合計		
新国立劇場オペラ研修所	悩める劇場支配人	D.チマローザ	3	3	0	0	5	0
	ジャンニ・スキッキ	G.プッチーニ	0	0	2	2		
大阪音楽大学	秘密の結婚	D.チマローザ	2	2	0	0	3	0
	魔笛	W.A.モーツァルト	0	0	1	1		
国立音楽大学	コジ・ファン・トゥッテ	W.A.モーツァルト	2	2	0	0	2	0
東京藝術大学	魔笛	W.A.モーツァルト	2	2	0	0	2	0
京都造形芸術大学	フィガロの結婚	W.A.モーツァルト	0	0	0	0	0	2
昭和音楽大学	コジ・ファン・トゥッテ	W.A.モーツァルト	0	0	0	0	0	2＊2
4団体（2団体中止）	5作品（2作品中止）	3人（1人中止）	—	9/298	—	3/322	12/620	4

＊1　大規模会場で、教育研究型公演の開催あるいは計画が2回以上ある団体。合計および50音順の掲載。学生主催公演やゼミ単位の公演、有志による公演などは含まない。
＊2　劇場での公演は中止となり、映像収録がおこなわれた。

2-4. 教育研究団体公演【表5】

教育研究団体の公演は、実施と中止の判断が組織によって分かれる結果となった。コロナ禍の拡大のタイミングが稽古期間と重なって準備ができないなどが理由である。そうした中で、大阪音楽大学、国立音楽大学、東京藝術大学が劇場での公演をおこない、新国立劇場オペラ研修所も発表公演を実施している。

2-5. 海外団体公演【表6】

海外からの招聘公演は、10月に来日したフランスのアンサンブルKのもののみで、B.ジネール作曲《シャルリー ～茶色の朝》が2回公演された。神奈川県立音楽堂での公演には多くの観客が詰めかけた。

2021年に最も大型の公演となるはずだったウィーン国立歌劇場、巡回型公演を予定していたイタリアのパレルモ・マッシモ劇場、ハンガリー国立歌劇場の公演は、この年すべて中止されている。

3. 指揮者と演出家

（指揮者）

2021年に登場した指揮者は、国内外あわせて110人。そのうち、海外から来日した指揮者は9人、日本人指揮者は101人である。

一方、2021年に指揮する予定だった外国人指揮者は少なくとも14人（うちリッカルド・ムーティは来日したものの予定された一部の公演が中止）。公演自体が中止・延期、あるいは来日困難などの理由により、日本人指揮者や別の海外招聘指揮者への交代措置がとられるケースもあった。

（演出家）

2021年は海外の演出家は16人、国内は108人と2つのチーム（そのうち1つは韓国・朝鮮と日本のチーム）が演出家として名前があがっている。実際に演出家自身が来日したのは東京文化会館の《Only the Sound Remains ―余韻―》のアレクシ・バリエール。彼は作曲者サーリアホの子息でもある。一方、新国立劇場による《夜鳴きうぐいす》と《イオランタ》の演出家ヤニス・コッコスは、来日がかなわず、リモートで演出をおこなった。日本人演出家は粟國淳、伊香修吾、岩田達宗、中村敬一、眞鍋卓嗣などが複数のプロダクションの演出をしている。

4. オペラ作品と作曲家【表7】

2021年は海外の作品上演は337回、74作品と2020年に比べれば増加した。日本の作品の上演回数も283回、51作品と前年からは若干の回復傾向がみられる。

4-1. 海外のオペラ作品と作曲家【表8-1、表8-2】

2021年は《カルメン》が28回で1位になっ

表6　2021年海外団体*1の公演活動データ（A.大規模会場）

形態*2	上演月	国名	劇場名	上演作品名	作曲家名	上演回数	合計/総上演回数	中止・延期*3	開催都市数
その他	10月	フランス	アンサンブルK	シャルリー～茶色の朝	B.ジネール	2	2	0	1
—	6月	イタリア	パレルモ・マッシモ劇場	ラ・ボエーム	G.プッチーニ	0	0	2	1
				仮面舞踏会	G.ヴェルディ			4	3
—	10~11月	オーストリア	ウィーン国立歌劇場	ばらの騎士	R.シュトラウス	0	0	4	1
				ｺｼﾞ･ﾌｧﾝ･ﾄｩｯﾃ	W.A.モーツァルト			4	2
—	10~11月	ハンガリー	ハンガリー国立歌劇場	魔笛	W.A.モーツァルト	0	0	4	4
—		1ヶ国（3ヶ国中止）	1団体（3団体中止）	1作品（5作品中止）	1人（4人中止）	2	2/298	18	1都市（7都市中止）

＊1　劇場名は、主催者表記に準じる。
＊2　形態の分類手法は以下のとおり。
「その他」：音楽祭、合唱団などの芸術団体、実行委員会やプロジェクト等による公演。いわゆる歌劇場全体の引越し公演とは異なる形態もある。
＊3　中止公演は実施予定が発表済の公演のみを掲載している。そのため公式発表されていなかった公演については収録していない。

表7　オペラ作品、作曲家別の上演回数

	海外の作品			日本の作品			合計		
	作曲家数	作品数	上演回数	作曲家数	作品数	上演回数	作曲家数	作品数	総上演回数
2004年	49人	99作品	753回	43人	61作品	414回	92人	160作品	1167回
2005年	57人	111作品	826回	50人	60作品	376回	107人	171作品	1202回
2006年	47人	100作品	800回	50人	71作品	424回	97人	171作品	1224回
2007年	55人	105作品	721回	41(46)人	59作品	352回	96(101)人	164作品	1073回
2008年	50(51)人	107作品	782回	51(52)人	70作品	437回	101(103)人	177作品	1219回
2009年	49(50)人	99作品	653回	48(49)人	48作品	335回	97(99)人	147作品	988回
2010年	42(44)人	86作品	654回	41人	59作品	516回	83(85)人	145作品	1170回
2011年	38人	88作品	530回	34(36)人	51作品	373回	72(74)人	139作品	903回
2012年	51(52)人	97作品	636回	55(56)人	75作品	481回	106(108)人	172作品	1117回
2013年	41(45)人	99作品	675回	56(59)人	83作品	464回	97(104)人	184作品	1139回
2014年	44人	87作品	607回	50(52)人	84作品	454回	94(96)人	171作品	1061回
2015年	44(45)人	89作品	690回	58(61)人	84作品	435回	102(106)人	173作品	1125回
2016年	51(53)人	99作品	669回	52人	86作品	431回	103(105)人	185作品	1100回
2017年	41人	85作品	607回	54人	83作品	458回	95人	168作品	1065回
2018年	44人	85作品	640回	53人	84作品	394回	97人	169作品	1034回
2019年	50人	103作品	658回	54人	85作品	426回	104人	188作品	1084回
2020年	24人	51作品	179回	27人	41作品	216回	51人	92作品	395回
2021年	38(39)人	74作品	337回	36人	51作品	283回	74(75)人	125作品	620回

＊（　）内は、共作者・編曲者等を入れた場合の数字。

た。新国立劇場、びわ湖ホールなどで取り上げられたことが要因である。2位の《魔笛》は、東京二期会、名古屋二期会、大分二期会のほか、東京藝術大学、大阪音楽大学の教育研究機関、小田原オペラなど地域の団体活動などでも取り上げられた。

4-2. 日本のオペラ作品と作曲家【表9-1、表9-2】

大規模会場での上演数では、オペラシアターこんにゃく座の上演した舞台が上位を占めた。吉川和夫、萩京子、寺嶋陸也の共同作曲による《遠野物語》が大規模会場で1位、林光作曲の《森は生きている》が2位、萩京子作曲の《アルレッキーノ―二人の主人を一度に持つと―》が3位となった。

表8-1　2021年に日本で上演された海外のオペラ作品
（大規模会場での上演実績のあるもの、全74作品中・上位9作品、タイトルは便宜的に統一）

No.	作品名	作曲家名	A.大規模会場	B.中・小規模会場	合計
1	カルメン	G.ビゼー	18	10	28
2	魔笛	W.A.モーツァルト	20	7	27
3	ラ・ボエーム	G.プッチーニ	17	6	23
4	こうもり	J.シュトラウスⅡ世	4	11	15
5	フィガロの結婚	W.A.モーツァルト	10	2	12
5	椿姫	G.ヴェルディ	4	8	12
7	蝶々夫人	G.プッチーニ	11	0	11
7	メリー・ウィドウ	F.レハール	8	3	11
9	ジャンニ・スキッキ	G.プッチーニ	4	5	9
合計/総上演回数	—	—	96/298	52/322	148/620

表8-2　2021年に日本で上演された海外の作曲家（全39人中、上位7人）

No.	作曲家名	上演回数
1	G.プッチーニ	58
2	W.A.モーツァルト	53
3	G.ヴェルディ	34
4	G.ビゼー	28
5	G.ドニゼッティ	19
6	J．シュトラウスⅡ世	16
7	R.ワーグナー	15
合計/総上演回数	—	223/620

表9-1　2021年に国内で上演された日本のオペラ作品（A.大規模会場）　＊大規模会場で、上演回数10回以上の作品。

No.	作品名	作曲家	上演回数	上演団体数	公演団体	備考
1	遠野物語	吉川 和夫/萩 京子/寺嶋 陸也	33	1	オペラシアターこんにゃく座	中・小規模会場で6回公演あり
2	森は生きている	林　光	13	1	オペラシアターこんにゃく座	中・小規模会場で29回公演あり
3	アルレッキーノ―二人の主人を一度に持つと―	萩　京子	12	1	オペラシアターこんにゃく座	中・小規模会場で1回公演あり
合計/総上演回数		—	58/298	—	—	—

表9-2　2021年に国内で上演された日本のオペラ作品（B.中・小規模会場）
＊中・小規模会場で、上演回数20回以上の作品。

No.	作品名	作曲家	上演回数	上演団体数	公演団体	備考
1	トラの恩返し	李　在浩	31	1	オペレッタ劇団ともしび	—
2	森は生きている	林　光	29	1	オペラシアターこんにゃく座	大規模会場で13回公演あり
3	口はロボットの口	萩　京子	23	1	オペラシアターこんにゃく座	大規模会場で2回公演あり
合計/総上演回数		—	83/322	—	—	—

5. 上演地域の分布と会場別データ【表10、表11、図2、表12】

表10にまとめたとおり、2021年は東京が1位、2位に神奈川、3位が愛知と、ほぼ例年通りの状況が見られた。一方、2021年は全国3県で全幕のオペラ公演がおこなわれていないことが記録されている。

表11では、大規模会場での公演、中・小規

表10　2021年の都道府県別上演回数

No.	都道府県名	国内団体		教育研究団体		海外団体		合計		
		団体数	上演回数	団体数	上演回数	団体数	上演回数	団体数	上演回数	上演回数順位
1	北海道	5	6	0	0	0	0	5	6	18
2	青森	1	3	0	0	0	0	1	3	33
3	岩手	2	5	0	0	0	0	2	5	21
4	宮城	2	6	0	0	0	0	2	6	18
5	秋田	1	1	0	0	0	0	1	1	42
6	山形	3	3	0	0	0	0	3	3	33
7	福島	1	5	0	0	0	0	1	5	21
8	茨城	2	5	0	0	0	0	2	5	21
9	栃木	3	4	1	1	0	0	4	5	21
10	群馬	3	3	0	0	0	0	3	3	33
11	埼玉	14	23	0	0	0	0	14	23	**6**
12	千葉	5	10	0	0	0	0	5	10	12
13	東京	58	218	4	10	0	0	62	228	**1**
14	神奈川	18	43	1	2	1	2	20	47	**2**
15	新潟	4	5	0	0	0	0	4	5	21
16	富山	2	14	0	0	0	0	2	14	**8**
17	石川	4	9	0	0	0	0	4	9	13
18	福井	2	7	0	0	0	0	2	7	15
19	山梨	4	5	0	0	0	0	4	5	21
20	長野	4	6	0	0	0	0	4	6	18
21	岐阜	4	13	0	0	0	0	4	13	**10**
22	静岡	3	17	0	0	0	0	3	17	**7**
23	愛知	11	39	2	4	0	0	13	43	**3**
24	三重	4	8	0	0	0	0	4	8	14
25	滋賀	3	14	0	0	0	0	3	14	**8**
26	京都	6	32	0	0	0	0	6	32	**4**
27	大阪	7	10	1	3	0	0	8	13	**10**
28	兵庫	11	24	0	0	0	0	11	24	**5**
29	奈良	2	3	0	0	0	0	2	3	33
30	和歌山	3	3	0	0	0	0	3	3	33
31	鳥取	1	1	0	0	0	0	1	1	42
32	島根	0	0	0	0	0	0	0	0	—
33	岡山	2	2	0	0	0	0	2	2	40
34	広島	3	5	1	2	0	0	4	7	15
35	山口	5	5	0	0	0	0	5	5	21
36	徳島	0	0	0	0	0	0	0	0	—
37	香川	2	5	0	0	0	0	2	5	21
38	愛媛	1	1	0	0	0	0	1	1	42
39	高知	2	2	0	0	0	0	2	2	40
40	福岡	3	7	0	0	0	0	3	7	15
41	佐賀	2	3	0	0	0	0	2	3	33
42	長崎	0	0	0	0	0	0	0	0	—
43	熊本	2	3	0	0	0	0	2	3	33
44	大分	2	5	0	0	0	0	2	5	21
45	宮崎	2	4	0	0	0	0	2	4	31
46	鹿児島	4	5	0	0	0	0	4	5	21
47	沖縄	1	4	0	0	0	0	1	4	31
合計	—	—	596	—	22	—	2	—	620	—

表11　2021年の都道府県別・地域別、公演会場規模別分布

都道府県名	A.大規模会場		B.中・小規模会場		上演回数比率	地域
	会場数	上演回数	会場数	上演回数	総上演回数	
北海道	3	4	1	2	4.68%	北海道・東北
青森	2	3	0	0		
岩手	3	4	1	1		
宮城	2	4	1	2		
秋田	1	1	0	0		
山形	3	3	0	0		
福島	1	2	1	3		
地域合計	15	21	4	8	29	
茨城	0	0	3	5	51.77%	関東
栃木	2	2	3	3		
群馬	1	2	1	1		
埼玉	7	10	10	13		
千葉	1	2	6	8		
東京	16	121	41	107		
神奈川	8	16	15	31		
地域合計	35	153	79	168	321	
新潟	3	3	2	2	19.19%	中部・甲信越
富山	3	5	6	9		
石川	3	3	4	6		
福井	1	1	4	6		
山梨	0	0	5	5		
長野	2	2	3	4		
岐阜	1	2	9	11		
静岡	9	13	3	4		
愛知	12	21	8	22		
地域合計	34	50	44	69	119	
三重	5	7	1	1	15.65%	関西
滋賀	4	14	0	0		
京都	1	2	17	30		
大阪	4	9	4	4		
兵庫	4	14	6	10		
奈良	1	2	1	1		
和歌山	1	1	2	2		
地域合計	20	49	31	48	97	
鳥取	0	0	1	1	3.71%	中国・四国
島根	0	0	0	0		
岡山	1	1	1	1		
広島	1	5	1	2		
山口	4	5	0	0		
徳島	0	0	0	0		
香川	0	0	3	5		
愛媛	0	0	1	1		
高知	1	2	0	0		
地域合計	7	13	7	10	23	
福岡	2	4	2	3	5.00%	九州・沖縄
佐賀	0	0	3	3		
長崎	0	0	0	0		
熊本	1	1	2	2		
大分	1	2	1	3		
宮崎	2	2	2	2		
鹿児島	1	1	4	4		
沖縄	1	2	2	2		
地域合計	8	12	16	19	31	
合計	**119**	**298**	**181**	**322**	**620**	**—**

同一館内の複数の会場、同一大学内の複数の会場は、規模別に1カ所とした。
例：新国立劇場オペラ劇場、新国立劇場中劇場は大規模会場で1カ所。新国立劇場小劇場は中・小規模会場で1カ所。

図2　地域別総上演回数推移（単位・回）

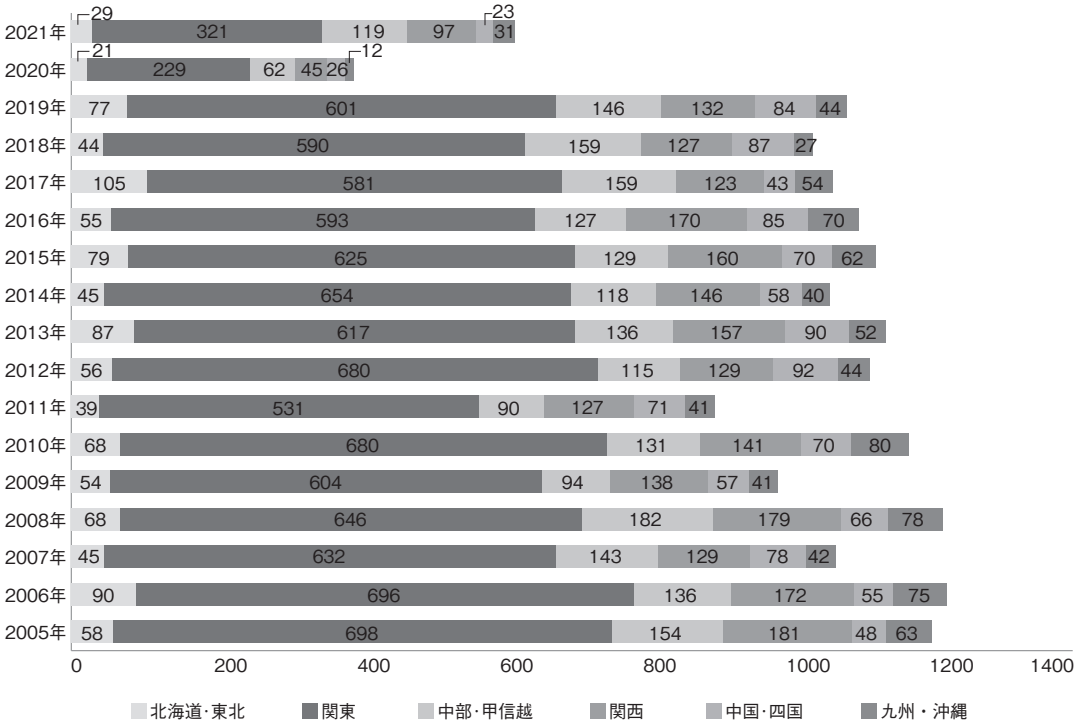

表12　2021年の会場別総上演回数（A.大規模会場で5回以上開催の会場。[　] 内は同一施設内のB.中・小規模会場）

順位	都道府県	会場名	国内団体	教育研究団体	海外団体	小計	総上演回数	客席数*1（席）
1	東京都	新国立劇場オペラ劇場	59	0	0	59	62 [2]	1,814
		新国立劇場中劇場	0	3	0	3		1,038
		新国立劇場小劇場	0	[2]	0	[2]		[358]
2	東京都	日生劇場	19	0	0	19	19	1,330
3	東京都	東京文化会館 大ホール	14	0	0	14	14	2,303
4	滋賀県	滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール 大ホール	2	0	0	2	11	1,848
		滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール 中ホール	9	0	0	9		804
5	兵庫県	兵庫県立芸術文化センターKOBELCO 大ホール	8	0	0	8	8 [2]	2,001
		兵庫県立芸術文化センター 神戸女学院 小ホール	[2]	0	0	[2]		[417]
6	東京都	新宿文化センター大ホール	7	0	0	7	7	1,802
7	神奈川県	昭和音楽大学テアトロ・ジーリオ・ショウワ	6	0	0	6	6	1,367
8	広島県	JMS アステール・プラザ 大ホール	5	0	0	5	5	1,200
合計／総上演回数		—	129 [2]	3 [2]	0	132 [4]	132 [4] /620	—

＊1　各会場の1回あたりの客席数は、オーケストラピット設営の有無、会場の使用形式にかかわらず、最大値とした。

模会場での公演別の実施状況がわかる。2021年は大規模会場での公演が確認できなかった県が9つあった。また、例年同様に、半数以上の公演が関東の7都県に集中していることがわかる。

表12で、会場別総上演回数を見てみよう。例年最上位となる新国立劇場では、中止が比較的少なく（3回）、2021年は大規模会場で62回、中・小規模会場で2回を数えた。日生劇場が19回（中止は2回）など、予定されていた公演がほぼ実施されたことで、従来どおりの回数が確保されている。

6. 演奏会形式など

2021年は、演奏会形式やセミ・ステージ形式などにより、全幕あるいは全曲上演が、29団体により38回公演されたと記録されている。

東京二期会の《サムソンとデリラ》、びわ湖ホールの《ローエングリン》、東京・春・音楽祭2021の《マクベス》、サントリーホールの《ラ・トラヴィアータ》など、演出こそなかったものの、規模や音楽的な到達度においては、演出付きの全幕上演に匹敵、あるいは凌駕するような成果をあげた公演がいくつもある。音楽で語り、ドラマをつくりあげる演奏家たちの力は、一つひとつの公演において、圧倒的な迫力をもって観客席に届けられた。

演奏会形式で新作がとりあげられるケースもある。細川俊夫の《二人静～海から来た少女～》（日本初演）はサントリーホールで、竹内一樹の《25時58分、青山一丁目交差点》（世界初演）は東京都のかん芸館でそれぞれ上演されている。新作は、集客も勘案してピアノ伴奏や小規模な会場を使って上演する手法がとられる。その後に、大規模な会場や、演出つきの上演などの展開につなげていければ尚可であろう。ただし、会場規模やオーケストラ編成の大きさを抑えて上演することが効果を生むこともある。

バロック・オペラが演奏会形式で取り上げられるケースもあった。「北とぴあ国際音楽祭2021」がラモーの《アナクレオン》を演奏会形式で上演した。バロック・オペラも、古楽器の響きにこだわり、音楽面に注力して上演することが成果につながるケースも少なくない。演奏会形式での上演にも、オペラの未来を見て取ることができそうだ。

7. まとめ

2020年3月以降、コロナ禍によって止まらざるを得なかった上演活動は、2021年に入ってもなお、多くの制限を受け、さらに陽性者が出ればすぐに公演中止に追い込まれるなど、直接の影響が続いた。こうした際どい状況の中でおこなわれたオペラ制作や公演の積み重ねを一つひとつ丁寧に記録することが本年鑑の使命である。

2021年のオペラ公演の開催状況は、2020年に比べれば、数の上では回復基調にあるようにも思われる。しかしながら、稽古の進行中には毎回のようにPCR検査をおこない、舞台の上では、出演者が互いに距離を保ち、飛沫の付着する舞台面に接触しないように演技するなど、表現方法にも多くの制限があり、制作作業は増える一方で、大変な負荷がかかった。リスク排除のために細心の配慮を払った上で公演制作がおこなわれていても、陽性者が出ることもある。結果として中止・延期に追い込まれた公演も多数あった。観客に対しても来場数に制限を設けてチケットを販売し、来場者カードの記入、入場者の検温、消毒の徹底、ロビーでの会話は自粛、ブラボーなどの掛け声は禁止、終演後もブロックに分けて順次退場など、数々の要請がおこなわれた。

海外からの招聘者が来日できない、あるい

は来日後2週間の隔離、例外的にバブル方式がとられたケースもあるなど、大いに行動が制限されて不自由な中での創造活動が強いられた。

政府や各地方自治体による緊急支援措置は混乱もあったものの、結果として各組織や個人の活動継続に活用されていった。こうした状況下で多くの関係者の努力が活動機会につながった様子を、数字から読み取っていただければ幸いである。

（本稿のデータ分析後に判明した公演記録があるため、巻末の公演記録と若干の相異点があることをお断り致します。）